



今回の紙面

- ◆地域医療最前線 NO. 50 《深澤郁雄 院長》 ◆看護師さんのページ NO. 30 《長尾睦美 看護部長》
- ◆研修医のページ NO. 33 《高梨俊洋 先生》
- ◆一般社団法人しまね地域医療支援センターの活動紹介
- ◆ドクターヘリの広域連携の取組み



比較的裏山に近いこともあり、夏には虫捕りに行ったり、須磨の海岸へ釣りに

年仁多郡三成町立三成病院となつてから第7代目の院長ということになります。出身は兵庫県神戸市で、幼少の頃には小児喘息で通院していた兄とともに病院へ行つて、兄の治療が終わるまで院内外をうろろして医師や看護師が働く姿を見たことが、後に医師を目指すきっかけになったのではないかと思います。昭和58年に島根医科大学に入学した当時はコンビニもなければ、夜になると大学周辺で食事の

がなかったことや夕刊がないことにカルチャーショックを受けたものでした。神戸は北に六甲山系を擁しており、比較的行ったり、須磨の海岸へ釣りに



町立奥出雲病院
院長 深澤 郁雄

昨年10月1日より町立奥出雲病院長を拝命することになりました。昭和28



NO. 50

行ったりと子供の頃には自然に簡単に触れて遊べていたものです。しかし、高度成長期になり、宅地造成が進んだ結果、裏山は住宅地と化してしまい、昆虫、カエルやサワガニも消え失せてしまいました。島根で学生生活をするうちに、日御碕ではカサゴ(ボツカ)やメジナ(クロアイ)が面白いように釣れて、立久恵峡ではホタルの乱舞を見ることが出来、感動いたしました。なんと島根は自然が豊かで、食に豊かな土地であろうかといつも思っております。そしてこの奥出雲の地には仁多米だけでなく、山菜に茸等、季節折々の食材を楽しむことが出来ます。その奥出雲で地域医療に貢献できるということは有難いことだと感じています。

しかし、地域医療の危機が叫ばれている昨今、奥出雲の地域医療を考えますと問題は色々あります。まず、医師不足に関しては当院だけの問題ではなく、全国的な医師の不均衡や専門医志向により病院の存続にも関わるほど深刻になっています。当院でも、平成14年には10人いた医師が、平成22年には半減してしまい、前病院長をはじめスタッフが町内全9地区を回り、タウンミーティングを開催し、診療体制の縮小、夜間救急体制の見直し等を説明し、町民の皆様にご理解を

得てこられました。そういった取組みもあり、現在、常勤医師8人にまで復活しました。医師がいてもそれを支える看護師等の助け無しには医療は機能しません。コメディカルのマンパワー不足も深刻です。当地のような中山間に人材を呼び込むには病院だけでなく自治体、住民を巻き込んだ大きな議論をしていかなければならないと感じている今日この頃であります。

町立奥出雲病院



町立奥出雲病院



社会医療法人石州会 六日市病院

看護部長 長尾 睦美

社会医療法人石州会六日市病院は、人口約6,700人の吉賀町で唯一の入院機能を持つ救急告示病院であり、地域の医療の中核的な役割を担っています。

昭和56年に開院後、医療法人、特別医療法人、平成21年には社会医療法人と転換しながら、島根県・益田圏域の医療計画に沿って事業を進めています。そして病院機能分化の進む中で、社会医療法人石州会は、平成24年に県内で初めての介護療養型老人保健施設「六日市苑」を開設、現在医療病床110床（一般50床、医療療養60床）、老健154床、合計264床で運営しております。



看護職員数は197名、そのうち看護師・准看護師134名（准看学生44名）、介護福

社士・補助者63名、看護職の平均年齢は42才ですが年齢層は幅広く中間層が少ない現状です。



六日市病院

外来を中心に、県外を含むこの地域の救急の体制を整備する一方で、一般病棟では医療が高度化複雑化する中で在院日数の短縮に取組み、後方支援となる医療療養病棟では、患者様の高齢化に伴い疾患の重複もあって入院が長期化し、自宅退院が難しくなっています。老健施設は、強化型を基準として地域医療介護連携室を中心に、在宅での介護の難しい方を受け入れています。今後の都市部の病院の先取りといわれるのが、この現状であるところでしょうか。

平成24年度（平成25年2月本審査）は、病院機能評価Ver6受審・更新という事業に取組みました。院長から「受審が目的ではなく問題を改善する過程が大事、通過点である」と言われました。その通り、患者様に安全な環境という視点から、医療安全推進室との協働が大きな位置を占め、検討を重

ねるようになり、多職種間の連携が深まり、総合案内、入院案内の整備、稼働調整担当配置、看護部人員の不足には事務部、薬剤部から応援体制等、後の活動への動機づけとなりました。今後も継続が必要となっています。そして「患者様にとって」ということがいつも考えられるようになりました。

また、今年度は、6月から電子カルテの運用が始まり、導入効果として医療安全の向上、動線の短縮などがあり、今後、これらを業務の効率化に繋げていくことが重要です。とはいえ、紙ベースからの変更に戸惑う職員も多く、安全に慎重に進めていきたいと思えます。

看護師不足の中、人材育成は重要な課題です。今年度は、入職者18名（准看護師）、新卒者11名を迎えました。

この人材を大切に育てるために新人看護師研修は時間をかけて取り組むことが必要です。救急については救急講習AHAのコース定期的研修を開催し、入職時から計画的に受講することにしていきます。臨床指導者等の資格取得その他のスキルアップのための研修参加介護職については介護福祉士の喀痰吸引など資格研修の参加等、すべての経費を病院負担しながら支援を続けてい

ます。そして、医療に興味を持ってもらうために、中学・高校生の看護体験や小中学校への訪問授業、地域文化祭等への参加も継続しています。

現場の看護師は大変ですが、医師の応援もあり『看護が楽しいといえる』環境づくりをし、次の看護師を育てる事に力を注いでいます。

今後も基本理念『患者様第一の医療・看護・介護の実践と地域医療への貢献』のもと「患者様の視点に立った看護・介護サービスの提供」に取組み、地域に信頼される病院を目指したいと思えます。



島根大学医学部附属病院

1年目研修医 高梨 俊洋



皆さん こんにちは。私はこの春から島根大学医学部

附属病院で医師としての生活をスタートさせました。

出身は隠岐の島町で、隠岐高校から

地域推薦枠1期生として入学しました。島根大学在学中は、1年間語学留学のために休学しておりましたので、同期の方々に1年遅れをとってしまいました。が、無事にこの春国家試験に合格することができました。



私は島

根大学の
研修プラ
ンを選択
し、1年
目に島根
大学医学
部附属病
院、2年
目に東京
都の青梅
市立総合

病院で働くことになりました。研修病院の選択に関しては学生時代にとっても悩み、様々な先輩方から大学と市中病院はスタイルが違うということを聞いていて、それならばどちらも経験できて損は無いだらうという理由から、このたすきがけコースを選択しました。また運良く青梅市の病院を選択できるチャンスももらい、東京の西多摩医療圏で唯一の救命救急センターを持つ病院ということや、島根以外の地域で暮らした経験も少ないことから、修行と

して島根を出てみようと考えました。留学中に日本を離れて日本のことを客観的に見ることもできたように、今回も島根を離れて他の文化・土地に触れることで、島根のことを医療面も含め客観的に見られるのでは、とワクワクしています。

さて、働き始めてから3ヶ月が経とうとしています。この3ヶ月はまるで一瞬の出来事のようなものでした。初めての2ヶ月は呼吸器・化学療法内科をローテートしました。オーダーの仕方、事務書類の書き方、看護師さんとのコミュニケーションの取り方など学生時代には知らなかった医師の業務を覚えるのに精一杯の毎日で、その上状態がシビアな患者さんも多く、病態のアセスメント、治療のプランニングなどを考えるのにも一生懸命でした。おかげで体重が適正体重まで戻りました。今の生活は1日1日が充実しており、日々新たな知識が積み上げられていくのを実感しています。

働き始めてから一番に感じることは、一人の患者さんに医療を提供するには、ものすごい数の方々、職種が関わっているということ。看護師、検査技師、栄養士、ソーシャルワーカーなど数えきれませんが、そのひとつひとつが患者さんにとって非常に重

要なフアクターです。在宅医療を進めていく際には、病院外も含めた他職種間の連携も重要だと感じました。私は医師ですが、その役目は医療全体のひとつの役割を担うことです。まだまだ半人前にもなれていませんが、それぞれのスペシャリストの方たちと肩を並べて意見を交換できる日が早く来るように日々努力していきたいと思えます。

一般社団法人しまね地域医療 支援センターの活動紹介

一般社団法人しまね地域医療支援センター

理事・事務局長 吉川 敏彦

島根大学医学部附属病院内に事務所を開設して早3ヶ月が経過しました。

一人でも多くの若手医師に県内を中心に研修・勤務をしていただけるよう、大学と県の医師6名に加え、県・市町村・大学からの派遣職員等、現在、総勢13名の事務局体制で活動を開始しています。

この3ヶ月、「しまね地域医療支援センター」として何をなすべきか、大学の各講座や県内医療機関、市町村など関係の方々と意見交換を重ねるとともに、研修医や医学生の参加する各種セミナー等にも参加してきました。こ

れまで、大学・各医療機関を始めとして、それぞれの立場から様々な医師確保の取組みが行われてきていますが、現場の皆様の声を聞くにつけ、改めて、当センターのミッションの難しさを痛感する日々です。

一方で、研修医や医学生の皆さんと接触を重ねていると、その熱い情熱に心打たれる場面にはしばしば出会います。いかにして、この皆さんに「しまねの魅力・安心感」を伝えていくか、できることは何でも取組んでいくつもりです。

まだまだ新たな戦略を打ち出すまでには至りませんが、新事業として、専門診療科ごとのモデルプログラム（10年程度で、県内医療機関等をローテートしつつ専門医取得が可能）集の作成や、県内初期臨床研修医ネットワークの構築（全員参加の合宿形式セミナーの開催等）等をはじめます。

また、当センターの存在を広く認知していただくことも重要です。活動の一端を知っていただくためにフェイスブックも立ち上げました。是非一度ご覧ください。

今まさに、今夏の医師臨床研修マッチングの手続きが始まりました。大学の地域医療支援学講座や各臨床研修病院と一緒にあって、「オールしまね」

で、医学部6年生に対し、県内での初期臨床研修の実施を働きかけています。この8月には、島根大学医学部附属病院に隣接して建設中の、若手医師の育成拠点「みらい棟」へ事務所を移転し、さらに活動を強化して参ります。

今後の当センターの活動に対し、皆様のご意見、ご支援・ご協力をよろしくお願います。



しまね地域医療支援センターのスタッフ

ドクターヘリ広域連携

離島・中山間地域、県西部地域などの医師不足が深刻化し、極めて厳しい医療情勢の中、救急医療体制の充実や地域における医療提供体制の維持のために導入したドクターヘリは、平成23年6月に運航を開始し、先月で2年を経過しました。

そして、中国地方5県と基地病院により協定を締結したドクターヘリの広

域連携が始まりました。

広域連携とは、県境を越えて他県にドクターヘリの運航を行うものです。



ドクターヘリが待機する各県の基地病院等から概ね70km（到着まで約30分）の範囲の地域を対象に、①事故現場等に他県のドクターヘリがより早く到着することができる場合、②重複要請で自県のドクターヘリが出勤できない場合、③多数傷病者が発生して他県のドクターヘリの応援が必要な場合等に他県のドクターヘリを要請することができるようになります。

島根県には、下の図のように広島県のドクターヘリが県西部地域等（浜田市、益田市、江津市、飯南町、川本町、美郷町、邑南町、津和野町、吉賀町）に、山口県のドクターヘリが益田圏域（益田市、津和野町、吉賀町）に乗り入れます。島根県ドクターヘリは鳥取県中西部地域や広島県北部地域に乗り入れます。

東西に長い島根県において、島根県ドクターヘリでは到着までに30分以上要していた県西部の地域では、広島

県や山口県のドクターヘリが出勤することにより、到着時間が短縮され、より一層の救命率の向上や後遺症の軽減が期待されます。

引き続き、救える命を救うため、また、離島・中山間地域、県西部地域などの医療現場で地域医療を守る方達を支える一助となるよう、関係機関の協力のもと今後もドクターヘリ事業に取り組んで参ります。

さらに、ドクターヘリをきっかけに、中国地方5県での行政、医療機関、消防機関等の緊密な連携により、救急医療体制及び災害医療体制の充実、医療情報の共有化等に繋げていければと思います。

【医療政策課 丸山】



島根県で勤務していただける方を紹介してください

友人・知人に島根県での勤務を希望される医師がおられましたら、是非ご紹介ください。ご紹介いただいた先生には、医療機関の情報等を提供し、U・Iターンを支援します。

医師募集・地域医療視察ツアー参加者募集

島根県は県内で勤務いただける医師を求めています。全国どこへでも専任の医師が出張し、具体的な相談に応じます。また、地域医療の視察ツアー（県負担）を実施しています。お気軽にお問い合わせください。

「赤ひげバンク」の登録者のみなさんへ

住所等に変更があった場合は、メールでお知らせ願います。

携帯からの問い合わせはこちら

〒690-8501 松江市殿町1番地 島根県健康福祉部 医療政策課 医師確保対策室

TEL 0852-22-6684 FAX 0852-22-6040

E-Mail iryuu@pref.shimane.lg.jp

ホームページ：[島根の医師確保対策](#)

検索

